Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

糸賀一雄の「最後の講義：愛と共感の教育」を読み解く(要旨)

渡部，昭男
遠藤，六朗
蜂谷 俊隆
金，仙玉
國本，真吾

(Citation)
日本特殊教育学会第56回大会(2018大阪大会) 自主シンポジウム1-18 糸賀一雄の「最後の講義：愛と共感の教育」を読み解く

(Issue Date)
2018-09-22

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006481

糸賀一雄の「最後の講義：愛と共感の教育」を読み解く

企　画　者：渡部　昭男（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
司　　会：渡部　昭男（同上［鳥取大学名誉教授／神戸大学附属特別支援学校長］）
話題提供者：遠藤　六朗（元びわこ学園／元びわこ学院大学）／蜂谷　俊隆（美作大学）
金　仙玉（愛知みずほ短期大学）
指定討論者：國本　真吾（鳥取短期大学）
KEY WORDS：糸賀一雄、『最後の講義：愛と共感の教育』、没後 50 年

【渡部 昭男：企画の趣旨】

糸賀一雄は、1968 年 9 月 17 日、大津市で開催された滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会での講演中に倒れ、翌 18 日に逝去した（享年 54）。2018 年は糸賀が亡くなって 50 年の節目となる。その講演録は『糸賀一雄の最後の講義：愛と共感の教育（改訂版）』（中川書店、2009）として公刊され、また神戸大学『教育科学論集』誌において既に中国語 2015、韓国語 2016、英語 2018 に翻訳されている。これを機会に、糸賀の最後の講義「愛と共感の教育」をテクストに、糸賀一雄が提起した「この子らを世の光に」「人格発達の権利の保障」などの思想と実践を振り返り、深める企画を持ちたい。

【遠藤 六朗：重症児者地域福祉づくりのなかで考えたこと】

重症心身障害者の通所づくりなど地域福祉に取り組んでいた頃、糸賀の「この子らを世の光に」はどういう時代を迎えたのかと考えていた。「悩める者は学びし者」、文字通りそのように生きた糸賀、その死に悲劇性をみる。「最後の講義」はまさにそこで締め括られてもいる。客観的知識的俯瞰的なものではなく、まさに当事者として現実のその先端に主体的に対峙しその経験から深く学ぶということであった。地域福祉の時代、糸賀から学んだことは３つ。

一つは、「この子らを世の光に」。それは「自立を求めて関係を創る」ということではないのか、ということ。

二つは、生命哲学としての糸賀思想の根源は共感にある。共感とは生命を持った〈からだ〉そのものの生命的表現であり。そこに本質的な「共生」の根拠があるのではないか。

三つ目は、「関わる」ことによって他者を理解し、自己が自己を知るのである（自覚）。その相互の関係が変わっていくのである。「関わる」ことも〈からだ〉である。「無財の七施」はまさにそのからだで関わることを指しているではないか。

地域福祉を迎え、糸賀の思想の意義はさらに広く深くなった。他者に関わるほかなき重症児者は、人間はつながり合っているいのちある存在であり、共同を求め、関係を創るのである。そういう糸賀の思いを受けとめることができた。

【蜂谷 俊隆:『糸賀一雄の研究』（関西学院大学出版会, 2015）を踏まえて】

『愛と共感の教育』は、糸賀の最晩年の思想が凝縮されており、その内容は現在でも全く色あせていない。

しかし、私は糸賀という人物のある時期の思想を取り上げる際、その生涯にわたる活動と思想の変遷、彼が生き、思想を形成した時代状況への関心を持たずにはいられない。私にとって糸賀のその時々の言葉は、そのような中に位置づけること抜きには捉えられない。

このような問題意識を持ちながら、『愛と共感の教育』を繙いてみると、糸賀の青年期の苦悩や戦時中の行政官としての体験、近江学園をはじめとする福祉現場や公的な施策を求めていく過程における自省と葛藤が、言葉の背後に窺える。

併せて、現代に生きる私が、私とは異なる状況、異なる時代を生きた糸賀の思想を読み解くことの意味についても考えざるを得ない。確かに、私が生きる現実と糸賀の生きた現実との間に共通項が見出され、その思想に示唆を受けたり、救われたりすることも多い。しかし、『愛と共感の教育』にあらわされた思想は、高度経済成長期の主流の価値観と対峙しつつ、一方では現実問題に即応する宿命から、その価値観から根本的に自由になってはいないかもしれない。

ゆえに、糸賀の思想を言葉のまま受け取るのではなく、その著作を通して彼の生きた現実を追体験し、そこから翻って現代の私自身の現実にどう向き合うか考えてみたい。

【金 仙玉：愛知県立大学大学院提出博士論文（2016）並びに『最後の講義』韓国語訳の経験を踏まえて】

ある言語からある言語への翻訳は訳者というフィルターを通して成せる作業である。そして訳者の訳する事項に関する知識は言うまでもなく、価値観や思い、人間性などの産物でもある。私は『最後の講義』韓国語仮訳の作業を行うなかで私というフィルターは果たして糸賀の思想や思いなどをどれだけ理解しているのか、何度も問いかけていた。中でも翻訳時に最も悩まされた言葉が「療育」であった。韓国の障害児者教育・福祉では「療育」という用語は用いられておらず「治療教育」という用語が用いられている。本シンポジウムでは共感思想の視点から「療育」について理解を深めたい。

更に言語とはその言語が持つ文化・価値観の表現方法であり、すなわち言語が異なれば価値観も異なるのである。日本語と韓国語が持つ異なる価値観において糸賀思想の共感をいかに築いていくかが重要ではないか。韓国においては、障害や障害児者に対する見方は未だに無能でかわいそうな同情の対象とされている。「この子らに世の光を」なのである。障害児者を同情の対象として捉える一方で、すべての障害児者の平等や人間としての尊厳を謳うのは矛盾である。この矛盾を打開するため、糸賀の思想の根幹をなす「この子らを世の光に」を韓国に少しでも伝えていきたい。

【國本 慎吾：糸賀（1968）「ミットレーベン」を踏まえて】

（WATANABE Akio, ENDO Rokuro, HACHIYA Toshitaka, KIM Sonok, KUNIMOTO Shingo）